

## 『太宰治はがき抄』上梓の意義

山内祥史

最新の太宰治全集である第一二次筑摩版の書簡の巻(一九九九)には、太宰治の宛先二二一の書簡が七九九通収められている。このうち、山岸外史宛書簡を書簡番号によって数えると一〇七通あって、集中もつとも多く、全体の八分の一を超えているようだ。現在発見されていて、全集未収の太宰治書簡は、三〇通ほどあるが、その裡に山岸外史宛書簡は見当たらない。山岸外史宛書簡は、筑摩版全集の第一次(一九五六)で一〇二通の多数が収められ、その後は、第五次(一九六八)で四通、第八次(一九七九)で一通航められただけだ。第八次以降の全集の書簡の巻には、どれにも、山岸外史宛書簡は一〇七通航められていて増減はない。おそらく、山岸外史によって、太宰治書簡は意識的に保存されていたのであろう。その期間が、一九三四年一〇月のふたりの交流開始直後から、一九四三年一二月の交流が疎遠になる直前の時期に到っていることから、現在我々が見得る山岸外史宛書簡は、その全容に近く、これから新しく発見される可能性は少ないと思われる。

一九六六年六月の桜桃忌を前にして、「佐藤家の押入れの奥に、ひとまとめにくくられ保存されていた」太宰治の佐藤春夫宛封書九通と葉書二五通、山岸外史宛葉書四通、井伏鱒二の佐藤春夫宛太宰治病状報告の封書一通などが発見され、同年写真入りで、奥野健男編「恍惚と不安 太宰治昭和十一年」として上梓されたことがある。このたびの『太宰治はがき抄』の上梓は、太宰治書簡の紹介としてはそれ以来の、四〇年振りの快挙といえよう。前書には、なぜか、山岸外史宛葉書四通だけの写真が見られない。また、これまでに発行された太宰治の写真集や展示用図録にも、山岸外史宛書簡の写真は見られないようだ。第一〇次筑摩版全集を私が編纂した時にも、目にするのできた山岸外史宛書簡の複写は、一九三五年一月九日付の葉書一通でしかない。その後東京の有名古書店の目

録で、一九四一年二月八日付の葉書二通の写真を見たが、二枚組で一、三〇〇、〇〇〇円の価がついていて、購入する気は起らなかった。もっとも多いはずの山岸外史宛葉書簡なのに、写真で目にする機会に少なかつたのである。その山岸外史宛葉書が、このたび、やす子夫人宛葉書一通を併せて計八三通という多数、ひとつひとつ写真版として掲げられ、佐藤秀明氏による精細な校異のついた翻刻と、行き届いた註記とが付されて、上梓されることになった。その資料的価値は、『恍惚と不安 太宰治昭和十一年』を遥かに凌いで、高いといつてよからう。

一九九八年六月、太宰治没後五〇年を迎えるに際し、求められて「毎日新聞」に一文を掲げたことがある。一九九七年の二月に『回想の太宰治』の著者津島美知子夫人が、一月に『太宰治論』の著者奥野健男氏が逝去された、その翌年のことであつた。そこで「このふたりの逝去は、太宰治研究のひとつの時代の終焉と新しい時代への転換とを象徴する出来事のように思われる」と記し、「作者という人間を主体と考へて作品を理解するのではなく、作品を主体と考へて作品を理解するのだから、作品はついに眞の姿を現さないのでないか」という念を述べたのである。文学研究の動向は、「人間」重視から「言葉」重視に転換しつつあると、指摘したかつてのであつた。二一世紀に入つて、この傾向は、太宰治研究書上梓の分野でも、活発になつてきたように思われる。『有明淑の日記』（二〇〇〇）、『太宰治・晩年の執筆メモ』（二〇〇二）、『井伏鱒二と太宰治』（同前）、『太宰治・原稿「お伽草紙」と書簡』（二〇〇三）、『太宰治原稿翻刻（第一分冊）（第二分冊）』（二〇〇四）、『太宰治広告』（同前）、『木村庄助日記 太宰治「パンドラの匣」の底本』（二〇〇五）など、「言葉」を重視した出版物が相次いでいて、その大部分が写真版複製であることも目に立つ。先の『恍惚と不安 太宰治昭和十一年』が、「昭和十一年の太宰治」という「人間」に重点をおいた資料の提示であつたのに対し、このたびの『太宰治はがき抄』は、「はがき」の「言葉」の一語一語に重点をおいた資料の提示になつているのも、時代の流れに鋭敏に反応した、傑れた出版物であることの証左のように思われる。